

令和元年第44回 グループホームまみや地域運営推進会議 議事録

会議日時	令和元年 7月 26 日 金曜日		時間 13:30 ~ 14:45					
場所	グループホームまみやリビング							
議題	1、グループホームまみや入居者様の現状について 2、ヒヤリハット、事故報告 3、グループホームとは 4、その他							
出席者	ご家族 1名 地域住民代表 1名 市町村職員 1名 ご利用者 1名 職員 3名							
ご利用者の状況	1 ユニット						合計	
	男性	1名	平均年齢	83歳	男性	1名		
	女性	8名	平均年齢	83,5歳	女性	8名		
							年齢 83,4歳	
	介護区分の分布	要支援2 0名	要介護1 1名	要介護2 3名	要介護3 1名	要介護4 4名	要介護5 0名	平均介護度 2,9
現在ホームでの看取り対応者2名有。医療と連携を取り対応を行っている。								
ヒヤリハット、事故報告書								
R元年6月1日～R元年7月20日迄 ヒヤリハット26件 事故報告書4件								
ご家族	多くのヒヤリハットが出ている様ですが、現場の職員さんは大変だね。							
職員	ヒヤリハットを上げる事で、職員が今起こっている事を共有し、事故が事前に防げると言う事も有ります。							
ご家族	別の施設に行った事があるけれど、入り口やエレベーターなどは、本人操作が出来ないような対応になっている施設もある。全室にカメラを付ければ見守りが出来るのでは？							
職員	それは身体拘束になります。玄関の施錠もグループホームでは拘束と言われている。							
職員	以前ご家族の希望で、離床センサーを使用した方がいます。居室内での転倒が多く、導入する事により、転倒回数が減ったが、介護保険では借りる事が出来ない為、ご家族の負担も大きい事となります。							
職員	国も身体拘束に対し、廃止を目指す方向に向けています。職員としては、課題が大きい。							
福祉課	グループホームは生活の場所であり、監視目的の場所では無い。又施設により取り決めも違う。							
グループホームとは								
<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループホームの職員は施設と呼ばれる事に抵抗が有る。</li> <li>・共に生きる ・血縁関係の無い家族(家庭) (日本)</li> <li>・高齢者 障害者 孤児などの生活弱者 (海外)</li> <li>・施設から解放して地域社会の一員として招き入れる。脱施設の考え方から生まれた施設 (日本 海外)</li> </ul>								
ご家族 よくわかりました。								

その他

ご家族 30～50名位の入居者がいる施設は経営していけると思うけど、9名の入居者で経営して行けるのですか？

職員 グループホームの1ユニットは2ユニットに比べ介護報酬が少しだけ多い設定になっていますが、空き室がなるべくなく、満床で有り、職員の配置人数にもより異なります。

ご家族より特別老人ホームに付いての入居にあたり金額、医師の対応等に付いての質問が有る。福祉課より施設により特定等が有る事を説明する。

ご家族 5月よりホームにお世話になり家族宛ての手紙を頂きました。生け花をしている写真が載っていました。家で過ごしていた時はこんな事がなかったと思うので、こういう機会をホームで作っていただきありがたいと思います。今後も色々な事をやってほしい。

福祉課 外出はされていますか？

職員 ホームの現状が、中々外に出掛けられないような状態です。1ヵ月に1回はボランティアをお願いし、レクレーションを行っています。

次回予定

令和元年 9月27日(金) 時間13:30～

# グループホームとは？

認知症グループホームは、「認知症対応型共同生活介護」として介護保険上に位置付けられ、認知症の人へ少人数(5人から9人)を単位とした共同住居の形態でケアを提供しています。家庭的で落ち着いた雰囲気の中で、食事の支度や掃除、洗濯などの日常生活行為を利用者やスタッフが共同で行うことにより、認知症状が穏やかになり安定した生活と本人の望む生活を実現することができます。

認知症の人にとって生活しやすい環境を整え、少人数の中で「なじみの関係」をつくり上げることにより、生活上のつまづきや認知症状を軽減し、心身の状態を穏やかに保ちます。また、過去に体験した役割を見出すなどして、潜在的な能力に働きかけ、認知症の人の失いかけた能力を再び引き出し、本人らしい生活を再構築することが可能となります。認知症グループホームのケアは、認知症の人を生活の主体者としてとらえ、個々の生活を重視して、残された能力を最大限に発揮できるような環境を提供し、楽しみや潤いのある普通の生活を送ることができるよう支援することを何よりも優先しています。

1. 慣れ親しんだ生活様式が守られる暮らしとケア  
(個人の生活史が尊重された継続性のある生活)
2. 生活障害を補い、もてる力が発揮できる暮らしとケア  
(本人の有する能力に応じた自立した生活)
3. 家庭的な暮らしの中で権利や尊厳が保障される暮らしとケア  
(少人数の中で個人として理解され受け入れられる生活)
4. 人としての自信と感情が育まれる暮らしとケア  
(衣・食・住全般に生活者としての役割のある生活)
5. 豊かな人間関係を保ち支え合う暮らしとケア  
(利用者、家族、スタッフ、地域社会との絆を大切にした生活)

---

日本は世界でも例を見ない速度で高齢社会を迎えました。そのため、早急に解決しなければならない様々な課題を抱えています。中でも、認知症対策は避けて通ることのできない重大な課題となっています。認知症の方が安定した日常生活を営むためには、個人の尊厳を保ち、価値ある人生を送ること、さらに、家族が安心して生活できることが必要です。また、認知症の方の問題に関しては、介護者として、あるいは被介護者として、誰もが当事者となる可能性があることを理解する必要があります。そういう意味においても、認知症の方は社会全体で支えなければならない存在です。しかし、現在においても、認知症に対する理解は国民全体に浸透しているとはいえない状況にあります。

また、認知症の方は、施設において、他の障害をもつ高齢者と同様に、集団の一員として処遇されています。こうした処遇により、認知症の方は様々な制約を加えられ、ストレスの多い状況に置かれることになり、痴呆症状を悪化させるケースもみられます。これは、既存の大型規模施設における介護方法では、処遇が困難な場合があることを意味しています。

海外においては、福祉先進国を中心に認知症グループホームの取組みが普及し、その効果も検証されてきました。日本においても海外の動きを受け、先進的な取組みとして、認知症グループホームが活動を始めています。

# グループホームの歴史

## スウェーデン発祥

グループホームの歴史についてみていきましょう。もともとグループホームが誕生したのは日本ではなくスウェーデンでした。スウェーデンは福祉などの面でとても先進している国として今でも知られていますが、認知症高齢者グループホームが誕生したのもスウェーデンが発祥でした。

1980年代に、スウェーデンにある小さな街の、普通の二階建ての家があったのですが、その家で行われているグループリビングケアと呼ばれるケアが、今のグループホームの発祥といわれています。スウェーデンでは1980年代からグループホームの原型となるものがすでに誕生していましたが日本ではその約10年後にグループホームのようなものが開設され始めました。これが1990年代の最初のころといわれています。

参考:[グループホーム | Wikipedia](#)

その後1997年には厚生労働省が地方対応型老人共同生活援助事業が法律として整備されました。これは認知症高齢者向けグループホームのことになります。介護保険制度でも在宅サービスの1つとして位置づけられたのです。

1997年に認知症グループホーム制度が創設されてその後2000年に、介護保険制度が作られ、グループホームも制度化されました。利用者は少人数による共同生活に支障がないことが条件でした。

その6年後、介護報酬が改定され、医療連携体制加算などが加わり、本人や家族が終の棲家として希望したり、看取りに対してはどうするのか、それがグループホームの課題としてあげられました。そして医療連携やスタッフの教育、制度を整備することが考えられたのです。

グループホームを出ることになった人のその後の現状としては医療機関に入院をする人が大半で、それ以外には特定老人施設、老健、療養型医療機関への入所が多くあり、自宅に帰る人はほとんどいないというのが現状です。

## 今後の課題

これがグループホームの歴史ですが、今のグループホームは、グループホーム内で看取らなければいけないということが避けられない問題としてあげられますので、それが今後の課題になりそうです。

医師不足、看護師不足の中でいかに対応していくのか、沿い手療養型再編でベッド数が削減されていますので需要に対しての対応が難しくなっています。長い歴史の中で最後まで楽しく暮らすことができるという目的で創立されたグループホームは、これからの歴史をどのようにすごしていくのかまだわかりません。

グループホームの言葉の意味

血縁関係のない友人や、気の合う仲間が集まって暮らしている家の事

今では若者が暮らしている家をシェアハウスと呼ぶことが多いですが。

本来は若者であれ老人であれ血縁関係も婚姻関係もない人たちが自主的に集まって暮らしている家のことです。